

和泉式部「物おもへば」の歌の「ほたる」と「魂」について--周辺の蛭を見ながら

著者	小柴 良子
雑誌名	清心語文
号	7
ページ	1-12
発行年	2005-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000273/

和泉式部「物おもへば」の歌の「ほたる」と「魂」について

——周辺の蛩を見ながら——

小柴 良子

録されることになる。『袋草紙』には、

貴布禰の御歌、

奥山にたがりておつる滝つせの玉ちるばかり物な思ひそ

『和泉式部集』の正統いずれにも採られていないが、次にあげる歌は非常によく知られている。

物おもへばさはのほたるもわが身よりあくがれいづる魂かとぞ見る
(宸翰本一六七四、松井本一九〇九)

この歌は、「をとこにわすられて侍けるころきぶねにまゐりてみたらしがはにほたるのとび侍けるをみてよめる」という詞書とともに、『後拾遺集』雑六「神祇」に入集している。注目されるのは、この後に続く、

おくやまにたがりておつるたきつせにたまちるばかりものなおもひそ

このうたはきぶねの明神の御かへしなり、をとこのこゑにて和泉式部がみみにきこえけるとなんいひつたえたる

という返歌と左注である。この謎めいた贈答歌は、多くの説話集に載

これは、和泉式部貴布禰に詣でて詠じて云はく、「ものおもへばさはの蛩もわがみよりあくがれ出づる玉かとぞみる」。時に男の声にて式部が耳に聞こえたる歌と云々。
(上巻)

とあり、他に『俊頼髓脳』『古本説話集』『無名草子』『世継物語』『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』などに見られる。

「物おもへば」の歌が、説話として有名であるのみならず、一首の歌として秀歌であることはいうまでもない。勅撰集に採歌されていることがまずそれを何よりも証明する。また、後に後鳥羽院が『時代不同歌合』に撰んでいることも着目すべきである。この歌合は、後鳥羽院が百人の歌人から秀歌を三首ずつ撰び、それを百五十番に番えたもので、和泉式部の「物おもへば」の歌は、

くらきよりくらき道にぞ入りぬべきはるかにてらせ山のはの月
もろともにこけのしたにはくちずしてうづもれぬ名を聞くぞかな

しき

とともに撰ばれている。「くらきより」の歌も「もろともに」の歌も、和泉式部の名高い名歌であり、これら二首とともに撰歌されたことからも、「物おもへば」の歌の歌としての価値が知られる。さらに、「物おもへば」の歌が、最後の百五十番目の番としておかれていることは特筆すべきで、この歌が高く評価されていたことが窺われるのである。

「物おもへば」の歌は、なぜ人々をひきつけるのだろうか。

一首全体を見た時に感じる「ほたる」のきわだった存在の大きさは否めない。この歌で和泉式部は、蛩を自らの魂ではないかと見る、という印象的な見立てを使う。

本稿では、蛩という素材に注目し、これが文学の中でどのような使用方をしているのかを探り、和泉式部の蛩と魂の詠み方に迫りたい。

二

蛩という文字が最初に見られるのは中国である。蛩が元来、漢文学の素材であることはよく知られたところである。五経(『易経』『尚書』『詩経』『礼記』『春秋』)の中で、蛩は『礼記』に一例のみ見られる。

腐草為蛩。腐草蛩と為る。

(月令第六)

腐った草が蛩になるというものである。また『詩経』に、

熠燿宵行 熠燿たる宵行

(豳風「東山」)

という句があり、『詩経』の注釈書である『毛詩』に、それに対する注

釈として「熠燿燐也。燐蛩火也。」という記述が見られる。明るく光っているのは鬼火であり、それは蛩であるというのである。蛩を、鬼火、つまりひとだまとするのは、和泉式部の蛩を魂と見るイメージに近いといえるだろう。中国での初期の蛩のイメージは、腐草と鬼火という薄気味悪いものであった^(注1)。

日本で蛩の語が初めに見出されるのは『日本書紀』である。

然彼地多有^二蛩火光神及蠅声邪神^一。復有二草木威能言語^一。

然れども彼の地に、多に蛩火なす光る神と蠅声なす邪神と有り。
復、草木威能く言語有り。

(卷第二 神代下)

蛩を妖しい神を表わす修飾語として使い、中国の不気味な初期の蛩のイメージに通じる^(注2)。そして、『万葉集』において、蛩が詠みこまれた最初の歌を見ることができる。

：いつしかと 我が待ち居れば もみち葉の 過ぎて去にきと 玉
梓の 使ひの言へば 蛩なす ほのかに聞きて 大地を 炎と踏み
て 立ちて居て…

(卷十三・三三四四・防人之妻)

この蛩は、「ほのか」の枕詞に過ぎず、蛩そのものが特に詠まれているわけではない。他に上代の文学で見られる蛩の例は、『懷風藻』の一例のみで、『古事記』や『風土記』などでは見当たらなかった。次にその『懷風藻』の例をあげる。

少無蛩雪志。長無錦綺工。適逢文酒会。終惡不才風。

少くして蛩雪の志無く、長りても錦綺の工無し。適に文酒の会に逢ひ、終に惡づ不才の風。

これは、晋の車胤が螢の光で、また孫康が雪明かりで書を読み苦学したという有名な螢雪の功の故事を踏まえているものである。螢雪の功は、『蒙求』によって広く日本に伝えられ、この『懷風藻』の例以降も、螢の使用例としてたびたび確認できる。『凌雲集』で見られる「書晶逢室晚螢輝。」という例も、車胤の故事に因んだものである。その後の『経国集』で見られる螢を詠みこんだ句は、「岸螢落^{チリ}兮火微^{カハヒ}。秋可^シ哀^{シム}兮。」というもので、ここでは、螢を秋の哀しい景物として扱っている。日本で螢は、夏の景物として知られるが、中国では秋の景物として詠まれ、この句が中国漢詩文の影響を色濃く受けていることがわかる。^{注3}『続日本紀』『文華秀麗集』『日本書異記』などには見出せないが、『菅家文章』になると、螢の用例は一気に増え、五例が数えられる。

- ① 悲栽冢上新生樹 悲しびて冢の上に新に生ふる樹を栽う
哭放愁頭舊聚螢 哭きて愁の頭に舊聚めし螢を放つ
偷謚貞文為汝詠 偷に貞文と謚して汝が詠を為る
夜来窺得巨門星 夜来窺ふこと得たり 巨門星
- ② 応知腐草螢先化 知るべし 腐草 螢先づ化れることを
且泣炎洲鼠独生 泣かむとす 炎洲 鼠独り生ることを
泉眼石稜誰定主 泉眼の石稜 誰か定れる主ぞ
飛蛾豈斷繞燈情 飛べる蛾 豈 燈を繞る情を断ためや
③ 一經不用滿簾金 一經用ゐず 簾に満つる金
況復螢光草逕深 況復むや 螢の光の草の逕に深からむや

業是文章家將相 業は是れ文章 家は將相

朱衣向上任君心 朱衣 向上 君が心に任さむ

④ 非燈非燭又非螢 燈にあらず 燭にあらず さらに螢にもあらず
驚見荒村一小星 驚きて見る 荒れたる村の一つの小さき星

問得家翁沈病困 問ふこと得たり 家の翁の病ひの困に沈みて

夜深松節照柴局 夜深くして 松節の 柴の局を照すなりと

⑤ 君政万機此一經 君が政の万機 此の一經

乘竜不忘始取螢 竜に乗じて忘れず 始めて螢を取めたまひしこ

とを

北辰高處無為德 北辰高きところ 無為の德

疑是明珠作衆星 疑はくは 是れ明珠の衆星と作りしかと

①③⑤は、車胤の故事を踏まえており、②は『礼記』の腐草を詠んでいる。④は、松明を見てその火を螢かと見紛うのであるが、螢と火の見立てはすでに中国漢詩文で詠まれている^{注4}。『菅家後集』では、

秋天未雪地無螢 秋天に雪あらず 地に螢なし

燈滅拋書淚暗零 燈滅え書を抛ちて 涙暗しく零つ

遷客悲愁陰夜倍 遷客の悲愁は陰き夜に倍せり

冥、理欲訴冥、 冥冥の理は冥冥に訴へまく欲りす

の一例が見られ、これも車胤の故事によっている。

平安時代の漢詩文の枠を示し、手本となるような漢詩文を集め編まれたとされる『本朝文粹』の螢の用例を確かめておく。螢は十八例見られる。

・秋蛩功績、車司徒之位高昇。

・天資淺薄、飭以「蛩雪之末光」。

・夕蛩積光、無助朗月之影。

・弱冠之初、入虎闕而問風教、壯年之際、依蛩幌而聳歲華。

・昔槐市共蛩雪、齊声誦者、或昇青雲之路、或駕朱輪之車。

・豈園門塵忽絕、五代之家、窓蛩空逃、三秋之役。

・方今能公聚窓之蛩、漸照蠹簡、過庭之鯉、志在「竜門」。

・匡衡昔白屋幽閑之夕、只披蠹簡於拾蛩之中、今朱輪照耀之朝、更加竜蹄於五馬之外。

・以言聚丹蛩而成功、雖欲属堯日之南明、問青鳥而記事、

猶恨暗漢雲之子細。

・昔垂丹蛩之幌、今割銅虎之符。

・若予者、久積丹蛩之光、未入白鳳之夢。

・以言性是愚魯、雖慙烏雲之嘲、志猶思齊、未抛蛩雪之業。

・住此三十年、出自蛩雪之勤、登於槐棘之貴。

・如臣者、久積草蛩之耀、漸老木雁之間。

右にあげた十四例は、すべて車胤の故事によつたものである。十八例中十四例という多さである。車胤の故事が人口に膾炙し、日本漢詩文

において蛩の典型的な使用例となつていたことがわかる。

・春籬燕暄、猶妬大厦之遲成、秋砌蛩乱、空悲常灯之未挑。

・己亥之歲、十月之初、落葉未尽、散春錦於林風、寒菊猶殘、映

「冬蛩於池水」。

・每至「苔色春、月影秋、花開鳥囀之朝、葉墜蛩乱之夕」、莫不「著玄覽之幽趣、望珠簾之高寒」。

これら三例は、『経国集』でも見られたように、蛩を秋の景物として詠んだ例である。次にあげる句では、灯火を蛩かと疑つており、『菅家文草』で見られた例と類似している。

・于時重陽後朝、宿雨秋夜、微光隔竹、疑殘蛩之在叢、孤点籠紗、迷細月之挿霧。

上代から平安にかけて、『万葉集』、漢詩文に表わされる蛩を追つて見てきた。『万葉集』で枕詞として詠まれていたものを除くと、中国漢詩文からの影響が認められる。漢詩文という性質上、それは至極自然なことともいえる。しかし、そうであるならば、中国の初期の蛩のイメージである腐草が詠まれているにもかかわらず、鬼火の方の例が見あたらないことは注目値する。先に述べたように、鬼火は和泉式部の魂と近い発想であるといえよう。このような発想は、日本の漢詩文において受け入れられなかったようである。

三

次に、散文作品における蛩の使われ方を順に見ていくこととする。

日本最古の物語である『竹取物語』に、蛩の用例は一例見える。

海山の道に心をつくしはてないしのはちの涙ながれき

かくや姫、光やあると見るに、蛩ばかりの光だになし。

置く露の光をだにもやどさまし小倉の山にて何もとめけむ
とて、返しだす。

かくや姫が石作皇子の持つて来た鉢を見てみると、螢ほどの光すらない、という記述である。螢は、小さな光、弱い光といった程度の意味で、『万葉集』での使用例に通じるものがある。

『伊勢物語』には螢が出てくる場面が三箇所ある。三十九段では、車胤の故事を踏まえて螢が表わされる。

うち泣きてやみぬべかりけるあひだに、天の下の色好み、源の至といふ人、これももの見るに、この車を女車と見て、寄り来てとかくなまめくあひだに、かの至、螢をとりて、女の車に入れたりけるを、車なりける人、この螢のともす火にや見ゆるらむ、ともし消ちなむずるとて、乗れる男のよめる。

いでていなばかぎりなるべみとし消ち年経ぬるかと泣く声を聞け

かの至、返し、

いとあはれ泣くぞ聞ゆるともし消ちきゆるものともわれはしらずな
(三十九段)

螢は女の顔を見るための明かりとして描かれる。その後の、螢を払いよけようとして詠んだ贈答歌の解釈には諸説あり、その中には、『法華經』の「仏此夜滅度 如薪盡火滅」によって螢を皇女の魂と見る説^注もある。しかしこの場合、まず螢を火に見立て、火が魂であると考えられ、螢そのものを魂と見るという和泉式部の見立てとは異なるも

のであると判断する。

むかし、男ありけり。人のむすめのかしづく、いかでこの男にものいはむと思ひけり。うちいでむことかたくやありけむ、もの病みになりて、死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」といひけるを、親、聞きつけて、泣く泣くつげたりければ、まどひ来たりけれど、死にければ、つれづれとこもりをりけり。時は六月のつこもり、いと暑きころほひに、宵は遊びをりて、夜ふけて、やや涼しき風吹きけり。螢たかく飛びあがる。この男、見ふせりて、ゆくほたる雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁につげこそ暮れがたき夏のひぐらしながむればそのことなくものぞ悲しき

(四十五段)

この段は、

兼葭水暗螢知夜 兼葭水暗うして螢夜を知る
楊柳風高雁送秋 楊柳風高うして雁秋を送る

(和漢朗詠集・螢・許渾〔佳句〕)

夕殿螢飛思悄然 夕殿に螢飛んで思ひ悄然たり

秋灯挑尽未能眠 秋の灯挑げ尽くして未だ眠ること能はず

(和漢朗詠集・恋〔白氏文集〕)

の句が影響を与えているとされる^{注6}。許渾の句では、螢が雁とともに夏から秋への季節の移り変わりを表わすものとして扱われている。『白氏文集』の方は、当時広く知られていた玄宗皇帝が楊貴妃を偲ぶ長恨歌である。丹羽博之氏は、中国において閨怨詩の流行時、この長恨

歌などの影響から、蛩は「女性の孤独な閨の秋の景物」として詠まれ、それが日本にも影響を及ぼしていると指摘されている^(注7)。まさしくこの場面の蛩は、孤独な秋の景物でもあるといえよう。「ゆくほたる」の歌の解釈に関しては、蛩を亡き娘の魂とする説^(注8)、雁を亡き娘の魂とする説^(注9)など、諸説あり定説を見ない。文脈を見ると、戻って来ると（亡き娘である）雁に伝えておくれと蛩に呼びかけるのが妥当ではないだろうか。ここでも、和泉式部の蛩を魂とする見立てとは重なるものではないと考える。この「ゆくほたる」の歌は、『後撰集』秋上に業平の作として入っており、物語から切り離すと、季節の移り変わりのみを表わす歌になる。

次にあげるのは、漁火を星か蛩かと見紛う例である。

やどりの方を見やれば、あまのいさり火多く見ゆるに、かのある
じの男よむ。

晴るる夜の星か河べの蛩かもわがすむかたのあまのたく火か

（八十七段）

火と蛩の見立ては、先にも『菅家文章』などで中国の影響としてあげているが、星も蛩の見立てとして、すでに中国漢詩文で使われているものである^(注10)。「晴るる夜の」の歌は、業平の歌として『新古今集』雑中にも採られている。

『大和物語』には、

蛩のとびありきけるを、「かれとらへて」と、この童にのたまはせければ、汗疹の袖にとらへて、つつみて御覽ぜさすとて聞えさせ

ける。

つつめどもかくれぬものは夏虫の身よりあまれる思ひなりける
り
（四十段）

の一例が見られる。ここでの蛩は、恋情を表わす。丹羽博之氏は、恋歌の蛩について、中国の閨怨詩の影響も指摘されながら、「蛩の火に「恋の思ひ」「胸の熱き思ひ」が掛詞として用いられ、更には「燃ゆ」と縁語」になるなどして、恋歌の蛩は「日本化」し、「深化」したと述べられる^(注11)。確かに、蛩という素材は日本特有の掛詞・縁語表現をとまなうことによつて、恋を表現しやすくなったといえるだろう。

『蜻蛉日記』にも、蛩は一例見られる。

木陰いとあはれなり。山陰の暗がりたるところを見れば、蛩は驚くまで照らすめり。
（中巻 天禄二年六月）

この場面は、兼家を待つ作者が、蛩を見て兼家が来た松明かと思ひ驚く^(注12)というところで、しばしば見られる蛩と火の見立てである。

次に『宇津保物語』の蛩の用例を見ていく。六場面が確認できる。

① 鳴く蟬も燃ゆる蛩も身にしあれば夜昼ものぞ悲しかりける

（祭の使）

② 夏は蛩を涼しき袋に多く入れて、書の上に置いてまどろまず、：

（同）

③ 光を閉ぢつる夕べは、叢の蛩を集め、：

（同）

④ 上、いかでこの尚侍御覽ぜむ、と思すに、大殿油ものあらはにとせばものし、いかにせまし、と思ほしおはしますに、蛩おはし

ます御前わたりに、三つ四連れて飛びありく。上、これが光にも

のは見えぬべかめり、と思して、立ち走りて、みな捕らへて、御袖に包みて御覧するに、あまたあらむはよかりぬべければ、やがて、「童べや候ふ。螢少し求めよや。かの書思ひ出でむ」と仰せらる。殿上の童べ、夜更けぬれば候はぬうちにも、仲忠の朝臣は、

承り得る心ありて、水のほとり、草のわたりに歩き、多くの螢を捕らえて、朝服の袖に包みて持て参りて、暗きところに立ちて、この螢を包みながらうそぶく時に、上、いとく御覧じつけて、直衣の御袖に移し取りて、包み隠して持て参りたまひて、尚侍の候ひたまふ几帳の帷子をうかけたまひて、ものなどのたまふに、かの尚侍のほど近くに、この螢をさし寄せて、包みながらうそぶきたまへば、さるうすもの御直衣にそこら包まれたれば、見るところなく見ゆる時に、…

(内侍のかみ)

⑤ 夜をくらみ螢求めしわが身だに消えし思ひの目にけぶりつつ

(国譲下)

⑥ 夜は螢を集めて学問をしはべりし時に、…

(同)

①は、『大和物語』でも見られたが、燃える恋の思いを表わす。②～⑥

は、車胤の故事を踏まえている。④は『伊勢物語』三十九段と同じで、螢は女の姿を見るための明かりである。朱雀帝が俊蔭女を見ようとす

る様子が描かれている。

『枕草子』には、次の二例が見られる。

・夏は夜。月のころはさらなり、やみもなほ螢飛びちがひたる。雨

など降るさへをかし。

(一段)

・虫は鈴虫。松虫。はたおり。きりぎりす。蝶。われから。ひをむし。螢。蓑虫。いとあはれなり。

(五十段)

どちらも、螢を単純に螢として扱っている。ここでは螢が日本的な夏の景物として認識されていることが注目されよう。

『源氏物語』において、螢は七場面で見られる。

風涼しくて、そこはかとなき虫の声々聞こえ、螢しげく飛びまがひて、をかしきほどなり。

(帚木) 卷

この描写は、『枕草子』と同じく、螢は夏の景色の一部である。

・隙々より見ゆる灯の光、螢よりけにはのかにあはれなりけり。

(夕顔) 卷

・篝火どもの影の、遣水の螢に見まがふもをかし。

(薄雲) 卷

最初の螢は、『竹取物語』と共通し、弱い光を表わす。二例目は火と螢の見立てである。これらは螢の使用例としては古くから見られるものであるが、ここに来て「あはれ」「をかし」ということばをとめない、螢が情趣的に使われていることが窺われる。次の二場面は車胤の故事によっている。

・窓の螢を陸び、枝の雪を馴らしたまふ志のすぐれたるよしを、よろづの事によそへなずらへて心々に作り集めたる、…

(少女) 卷

・さと光るもの、紙燭をさし出でたるか、とあきれたり。螢を薄きかたに、この夕つ方いと多くつつみおきて、光をつつみ隠したま

へりけるを、さりげなく、とかくひきつくろふやうにて。：

こゑはせて身をのみこがす螢こそいふよりまさる思ひなるら
め

〔螢〕卷

一例目は夕霧の苦学の様子を描き、次にあげた場面では、源氏が螢の光によって玉鬘の姿を螢兵部卿官に見せる。螢の光で女の姿を見るのは、『伊勢物語』『宇津保物語』から受け継がれており、ひとつのパターンとなっている。この場面で玉鬘の詠む螢の歌には掛詞による恋情が表わされている。次にあげるのは、源氏が亡き紫の上を思う場面である。

螢のいと多う飛びかふも、「夕殿に螢飛んで」と、例の、古言もかかる筋にのみ口馴れたまへり。

夜を知るほたるを見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり

〔幻〕卷

ここで源氏は、『伊勢物語』四十五段の亡き娘を偲ぶ場面において影響が指摘されている長恨歌の一節を口ずさむ。ここでも、孤独な情景の中で、それを表わす景物として螢は描かれている。

紛るることなく、遣水の螢ばかりを昔おぼゆる慰めにてながめ
たまへるに、：（夢浮橋）卷

この場面では、浮舟が、薫と匂宮との宇治での思い出として螢を見る。『幻』の巻の例と同じく、螢が孤独感を表わす景物として認識され描かれていると思われる。

以上、散文作品における螢の描写を通覧した。上代から平安にかけ

て、『万葉集』、漢詩文で見られた螢の使用例を踏襲しつつも、多様化し、様々な用例が認められた。しかしながら、和泉式部の螢を魂と見立てる方法は一例も見出せず、散文作品においても一般的ではないものである。散文作品の螢は、恋の思いなど日本独自に発展しているものもあるが、やはり中国漢詩文の影響は大きく、そこから抜け出すことはない。白楽天の長恨歌、「夕殿螢飛思悄然 秋灯挑尽未能眠」などは、螢を情緒的なものとして扱い、その影響により日本での螢の幅も広げられたように見受けられる。和泉式部の「物おもへば」の歌も無関係ではあるまい。

四

和歌に詠まれる螢を見ていく。八代集において螢が詠みこまれた歌は二十一首ある。内訳は、古今集二首、後撰集一首、拾遺集四首、後拾遺集三首、金葉集なし、詞花集二首、千載集三首、新古今集六首となり、それほど数は多くないものの、コンスタントに所収されている。これらの歌は、今まで見てきた螢の典型的な使用例にのっとって詠まれているものがほとんどである。

まず、車胤の故事によって、螢を苦学のイメージで詠んでいる歌をあげる。

：みなしご草に なりしより 物思ふことの 葉をしげみ けぬ
べきつゆの よるはおきて 夏はみぎはに もえわたる ほたる

をそでに ひろひつつ 冬は花かと 見えまがひ このもかのも
に ふりつもる 雪をたもとに あつめつつ ふみみていでし：

(拾遺集・雑下・五七一・源したがふ)

：人なみに かかる心を 思ひつつ 世にふるゆきを きみはし
も 冬はとりつみ 夏は又 草のほたと あつめつつ ひかり
さやけき 久方の：

(同・五七二・よしのぶ)

むかしわがあつめしものをおもひいでみなれがほにもくる蛍か
な

(千載集・夏・二〇一・藤原季通朝臣)

次は、蛍を火や星に見立てている歌である。

雲まよひほしのあゆくと見えつるは蛍のそらにとぶにぞ有りける

(拾遺集・物名・四〇九・すけみ)

さはみづにそらなるほしのうつるかとみゆるはよほのほたるなり
けり

(後拾遺集・夏・二二七・藤原良経朝臣)

さ月やみうがはにともすかがり火のかずますものはほたるなりけ
り

(詞花集・夏・七四・読人不知)

いさり火のむかしのひかりほの見えてあしやのさとにとぶ蛍かな
はるる夜の星か川辺の蛍かも我がすむかたにあまのたく火か

(新古今集・夏・二五五・摂政太政大臣)

(同・雑中・一五九一・在原業平朝臣、伊勢物語八十七段)

先に述べたように、次の歌は、許渾の「兼葭水暗螢知夜 楊柳風高
雁送秋」の句を踏まえる。

ゆく螢雲のうへまでいぬべくは秋風ふくと雁につげこせ

(後撰集・秋上・二五二・業平朝臣、伊勢物語四十五段)

また、次の二首も同じ句を踏まえていると思われる。一首目は、秋の
風情は感じられないものの、夜に草の中を蛍が飛ぶ様は許渾の句に重
なるものがある。二首目は、夏から秋へ向かう季節の推移が表われ、
この句を踏まえているといえよう。

いづちとかよるはほたるののぼるらんゆくかたしらぬ草のまくら
に

(新古今集・夏・二七二・壬生忠見)

ほたるとぶのざはにしげるあしのねのよなよなしたにかよふ秋か
ぜ

(同・二七三・摂政太政大臣)

次にあげるのは、燃える恋情を表わすものである。掛詞・縁語表現
をともし詠まれている。

あけたてば蟬のをりはへなきくらしよるはほたるのもえこそわた
れ

(古今集・恋一・五四三・読人しらず)

ゆふされば蛍よりけにもゆれどもひかり見ねばや人のつれなき

(同・恋二・五六二・紀ものり)

終夜もゆるほたるをけさ見れば草のはごとにつゆぞおきける

(拾遺集・雑春・一〇七八・健守法師)

おともせでおもひにもゆるほたるこそなくむしよりもあはれなり
けれ

(後拾遺集・夏・二一六・源重之)

なくこゑもきこえぬもののかなしきはしのびにもゆるほたるなり
けり

(詞花集・夏・七三・大式高遠)

あはれにもみさをにもゆる螢かなこゑたてつべきこの世とおもふ

に
(千載集・夏・二〇二・源俊賴朝臣)

恋すればもゆるほたるもなくせみもわがみの外の物とやはみる

(同・恋三・八二三・前中納言雅頼)

おもひあれば袖に螢をつつみていはばやものをとふ人はなし

(新古今集・恋・一〇三二・寂蓮法師)

次の歌は、少々異質であるが、仏法の句を象徴的に詠んだものである。

道のべのほたるばかりをしるべにてひとりぞいづるゆふやみのそ

ら
(新古今集・釈教・一九五一・寂然法師)

こうして八代集の螢の歌を見てみると、『後拾遺集』にある和泉式部の「物おもへば」の歌が、いかに異彩を放ち、一般的な螢の詠まれ方とは異なっているかがわかるだろう。

八代集においては螢と魂が詠みこまれた歌はないのだが、他の歌集にわずかなが見ることができ。螢を魂とする歌の初見は、

夏の夜はともすほたるのむねの火ををしもたえたる玉とみるかな

(古今和歌六帖・四〇二二・つらゆき)

である。「ほたる」の題で詠まれた六首中の二首目である。また、高遠は、白楽天の長恨歌、「夕殿螢飛思悄然 秋灯挑尽未能眠」を、題にして、

おもひあまり恋しき君がたましひとかけるほたるをよそへてぞみる
(夫木和歌抄・二二五九、高遠集・二八六)

と詠んでいる。この二首が、和泉式部の「物おもへば」の歌以前に螢

を魂と詠んだ例である。貫之の歌は、螢の火を絶えてしまった魂と見ている。「むねの火」ということばがあるので、恋の歌であらう。高遠

の歌は、長恨歌を題にしているが、長恨歌をこのような形で踏まえているのは画期的であると思われる。というのは、今までの長恨歌を踏まえた例は、『伊勢物語』『源氏物語』のどちらも、螢は亡き人を偲ぶ

気持ちや孤独感を表わしてはいたものの、その螢はあくまで景物であったからである。高遠は螢を恋しい人の魂と見ている。実際、長恨歌

で詠まれる螢は間違いなく景物である。しかしながら、先にも述べたように、中国には螢のイメージとして鬼火があった。白楽天自身は螢

を景物として詠みながらも、心中には鬼火のイメージがあり、螢に楊貴妃の魂を感じていたに違いないのである。^{注13} それを、高遠はこの

句から初めて汲み取ったのではないだろうか。「物おもへば」の歌は、

魂が詠みこまれていながらも不気味なイメージだけでなく、恋の美しさや寂しい孤独感も感じられ、鬼火というより、それが発展した長恨

歌の螢のイメージが背景にあることは容易に想像できよう。和泉式部もまた螢を魂としているが、この螢は、魂であると同時に、高遠以前

の長恨歌を踏まえた例で見られたような景物でもあるのではなからうか。^{注14} 高遠が螢を魂に「よそへてぞみる」と主体的に見ているのに

くらべ、和泉式部は螢を「魂かとぞ見る」と詠い、自然に目に入ってくる様子が窺われ、螢というひとつの景物を見ているかのようである。

和泉式部は螢を魂としながら、同時にそれをまた景物として見るという手法を使っている。高遠は、詩を詠んだ時の白楽天の気持ちを説明

して見せたが、和泉式部は、長恨歌の世界、作品そのものを忠実に描き出して見せたといってもいいだろう。つまり、長恨歌の蛩は、景物でありながら、魂のイメージも付加されており、両者の意味をあわせもっていた。和泉式部はそれに通じる歌を詠んだものと思われる。貫之の歌も和泉式部の歌と類似した傾向にあると思われるが、和泉式部の歌がより熟した形となっているだろう。

次にあげるのは、後に「夕殿蛩飛思悄然」を題として詠んだ三首である。

君ゆゑにうちもねぬよの床のうへに思ひを見る夏虫のかげ

(拾玉集・一九五八)

くるとあくむねのあたりももえつきぬ夕のはたる夜はのとし火

(拾遺愚草員外・四五八)

夏虫の影にはまがふともし火もおよばざりける身の思ひかな

(寂身法師集・二〇〇)

いずれも蛩を魂と詠んだものではなく、燃える恋の思いに絡ませながらの詠で、日本的な詠みぶりに戻っている。長恨歌において、蛩を魂とする発想は定着しなかったようである。「物おもへば」の歌の後に、蛩を魂と詠んだものとしては、

さは水にはたるのかげのかずぞそふわがたましひや行きてぐすら

ん

おぼえぬをたがたましひのきたるらんおもへばのきにはたるとび

かふ

(夫木和歌抄・三一九五、聞書集・一九二)

の二首が見出せる。他には、

是やさはあくがれにける玉かとてながめし沢の蛩なるらん

(林葉集・三三三七)

木がくれに身はうつせみの思ひ侘びうかるる玉や蛩なるらん

(壬二集・二八八七)

貴船川いはうつ浪にとぶはたるたがあくがるる玉にかあるらん

(後鳥羽院御集・七四一)

などがあり、和泉式部の影響が見受けられる。

中国の『毛詩』に鬼火を見たが、それ以後日本では、漢詩文、散文、八代集において、蛩にそのようなイメージを持つ例は皆無であった。和歌に和泉式部の前に二首見られたのみで、蛩を魂とする発想が、非常に独自性の強いものであることがわかった。また、和泉式部の歌は、長恨歌の影響を受けていると思われるが、その方法が特徴的で、蛩に魂、景物の両者を見るところであると考えた。

(テキスト)

『和泉式部集』は清水文雄『和泉式部歌集』(岩波文庫)、『和泉式部集』

『万葉集』以外の和歌は新編国歌大観、『礼記』『詩経』は新釈漢文大系

(明治書院)、『毛詩』は漢文大系(富山房)、『凌雲集』『経国集』は日

本文学大系(国民図書株式会社)、『法華経』は『法華経』(岩波文庫)、『

袋草紙』『本朝文粹』は新日本古典文学大系(岩波書店)、『懐風藻』

『菅家文草』『菅家後草』は日本古典文学大系(岩波書店)、『日本書紀』

『万葉集』『和漢朗詠集』『宇津保物語』は新編日本古典文学全集（小学館）、『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』は日本古典文学全集（小学館）に拠る。

注1 松原朗「蛩」（『漢詩の事典』大修館書店、平成十一年）など。

2 山崎みどり「蛩のイメージ」（『中國詩文論叢』三、昭和五十九年六月）

3 注2 山崎氏論文

4 丹羽博之「平安朝和歌に詠まれた蛩」（『大手前女子大学論集』二十六、平成四年十二月）、本間みず恵「蛩」考「平安朝和歌を中心にして」（『日本文学研究年誌』七、平成十年三月）などにおいて、『芸文類聚』『初学記』に蛩と火、星などの見立て、比喩が記されていることが指摘されている。

5 清原宣賢『伊勢物語惟清抄』（フートルダム清心女子大学古典叢書第三期七『惟清抄』福武書店、昭和五十七年）など。

6 細川幽齋『伊勢物語闕疑抄』（新日本古典文学大系『竹取物語伊勢物語』）など。

7 注4 丹羽氏論文

8 上坂信男『伊勢物語詳解』（有精堂、昭和四十四年）など。

9 契沖『勢語臆断』（『契沖全集第九卷』岩波書店、昭和四十九年）など。

10 注4に同じ。

11 注4 丹羽氏論文

12 上村悦子「源氏物語と蜻蛉日記」（『古代文学論叢五』『源氏物語と女流日記 研究と資料』武蔵野書院、昭和五十一年）

13 藤野岩友「中国の招魂歌と捕蛩歌と」（『中国の文化と礼俗』角川書店、昭和五十一年）に、長恨歌の「蛩を単なる景物として点じたものとすべきではなく、これを魂に見立てたものと考えるところに依って、一層適切な解釈となつて来る」とあり、玄宗皇帝の心境は「物おもへば」の歌にも通うものがあるとの指摘がある。

14 松井健児「和泉式部歌「沢の蛩」考」（『野州国文学』第二十六号、昭和五十五年十二月）に、「純粹な叙景歌であつて、それ以上のもので以下のものでないのではなからうか。」という指摘がある。

（こしば りょうこ／博士後期課程三年在籍）